

令和6年度 第2回 甲賀市総合計画審議会 会議録

- 開催日時** 令和6年7月2日（水曜日）18：00から19：30まで
- 開催場所** 甲賀市役所別館 会議室101
- 出席委員** 阿部委員、飯星委員、池田委員、岩倉委員、大北委員、大隅委員、金林委員、菊池委員、木村委員、佐治委員、杉崎委員、杉山委員、西田委員、服部会長、原田委員、松村委員
- 事務局** 吉川総合政策部長、藤橋総合政策部次長、橋政策推進課長、近藤室長、熊野課長補佐、橋本係長、植西主査、宮治主査、山本主査、中井主事
- 会議次第**
- 1 開会
 - 2 協議事項等
 - (1) 第2次甲賀市総合計画(第3期実施計画) たたき台について【資料1】【資料2】【資料3】
 - (2) 意見交換（グループ協議）
- 関連資料**
- ①第2次甲賀市総合計画（第3期実施計画）に係る審議委員意見書のまとめ【関連資料】
 - (3) スケジュール説明（予定）
- 3 その他

1. 開会

2. 協議事項等

(1) 第2次甲賀市総合計画(第3期実施計画) たたき台について【資料1】【資料2】【資料3】

事務局 : 【資料1】【資料2】に基づき、説明。

【資料3】について、事前に意見をいただき、まとめた資料を【関連資料1】として用意している。グループディスカッション形式で、【資料3】を主なテーマとして議論をしていただきたい。各テーブルで、自己紹介、意見交換、ディスカッションという流れです。協議内容については記録をとり、議事録として掲載する。

【関連資料1】に基づき、説明。

(2) 意見交換(グループ協議)

Aグループ

A委員 : B委員に伺いたい。甲賀市の主要駅は貴生川であり、昔は駅員2人が常時車いすの対応をしていただいた。甲賀市として利用促進と言っているものの、駅員が無人になれば苦しい。今後、貴生川駅は無人になるのか。

B委員 : サービス水準を維持しないといけないが、人手が不足していることは事実。採用計画の見直しを検討したい。意見として承る。

C委員 : '守る'ために'攻める'5つのプロジェクトは並行して進めるべき。地場産業でいうと「3. 選ばれるエリア形成プロジェクト」が該当するが、後継者がいないのが実情。地場産業への支援がないと経済は回らないので、継続して支援できる形が必要。

D委員 : 5つのチャレンジプロジェクト、施策計画、概要の深掘りが甘いのではないかと。64施策の欄はもっと埋められる。先日、日経新聞の記事で人口減、少産多死の記事があった。今後、人口は増えないので省人化、一人二役など、人口減少を前提とした対策をしないといけないのではないかと。

E委員 : 意見書同様、予算を使っている金額順に書いていただけるとわかりやすい。'新しい豊かさ'の豊かさとは何なのか。豊かな生活をしようと思うと現実的には貴生川より西に住む必要がある。安心・安全のまちづくりプロジェクトとあるが、安心と安全は別と考えないといけない。

D委員 : 交通の便でいうと、買い物や病院に行くから不便を感じる。逆の発想で、行かなくても買い物ができる、家で診療してもらえると交通の不便を感じない。このような発想も必要ではないか。

E委員 : 字(あざ)では1人で5役している。役を減らす必要がある。

F委員 : 土山町はまさに人口減少が著しい。何十年続いている宿場まつりのメンバーは地元出身者が多

かったが、高齢化が進み、地域おこし協力隊や他県から移住してきた方、体験型宿泊施設で活躍されている方など多様なメンバーに生まれ変わった。豊かと聞かれると断言できないが、幸せかと聞かれたら幸せといえる。この前の審議会にて、ある委員さんが「若者の流出を防ぐことは難しい。防ごうとすると反発して流出する。客観的に甲賀市を見てもらうために一度市外へ出ていってもよいと思っている。重要なのは戻ってきてもらうスキームづくり」と言われていることに大変共感した。お祭りのように市外に出ている魅力を感じるような仕組みづくりが必要。

D委員：甲賀市には工業団地が立地し、製造職の募集はたくさんあるが、首都圏で勤務をしていたような人がUターンする際に選ぶ仕事がないのが現実。

C委員：厳しい言い方かもしれないが、工業団地があるから、子育て支援が良いからという理由で人はなかなか来ないのではないかと。地場産業でいうと人が来て、住ませて、暮らすという一連のサイクルが必要。地域の良さに興味がある方に来てもらえるよう情報発信が重要。

D委員：住まなくてもまずは来てもらえるような、シティプロモーションが必要。

C委員：全般的にざっとやっても効果が薄いので、「子育て支援」、「信楽」などコンテンツごとにプロモーションをすべきと思う。

B委員：分野横断的にどういう取り組みをするか、どういう課題にどういったアプローチをするかが見えにくい。

E委員：学校の統合は進めるべきだと思う。

A委員：審議会委員のほかに一般の方の意見を聞きたい。

グループ討議おわり

Bグループ

G委員：視覚障がい者で、明暗くらいしかわからない。そのため、資料内容の把握は困難な部分がある。機器を使用して資料の読み上げはできるが、「資料の〇番を見てください」と言われても読み返しはできない。本日のような、会話ベースでの討論のほうがやりやすい。

H委員：甲賀市水口町に住んで、20年経つ。広告代理業を自営しており、普段からさまざまな企業・団体と携わる中で、情報交換をすることがある。その中で、素敵な企業が多くあるのに若者が流出していることに「もったいなさ」を感じている。うまく情報を発信できれば、地元就職が増えて、税収が増えて、子どもが増えて、という好循環を生むことができると思う。若者が留まることができるような仕組みができないかという視点で、いろいろな会議に参加させていただいているので、関連のご意見をいただけるとありがたい。

I委員：今は働く主婦をしている。甲賀町の出身で、より便利な市にしたいという思いで、委員会に参加

している。どうぞよろしくお願いいたします。

J委員：19歳で、大学の政策学部に所属している。中学校のときになかなか学校に行けない時期があり、適応指導教室などの甲賀市の取り組みで立ち直れた経緯もあり、委員会に出席させていただいている。大学へは電車に通っているのに、公共交通機関の減便を身にかけている。まだ大学生で知らないことも多くあるが、学ばせていただきながら若者目線で意見したい。

K委員：情報学の分野で研究としているが、その中で、まちづくりのシミュレーションなどにも携わっている。甲賀市は「立地が良い」と謳っているが、移動手段は市民任せというように見える。交通面のサービスを向上しないと、せっかくの良い立地を活かせない。今回は交通面の話ができるとういと思う。

H委員：交通の選択肢が絞られていると思う。甲賀愛がないことはないが、膨らませることがないと思う。例えば、「甲賀市の良いところはなんですか」と聞かれたときに、すぐに出ないと思う。また、定住するメリットも感じないと思う。

K委員：妻が湖南市出身であり、結婚を機に滋賀に来た。住む場所を探す中で、「選択肢がないから」という理由で、滋賀に住まずに京都に住むことになった。地方の環境が嫌というわけではないが、新しい選択肢がないということは若い人には厳しいのだと思う。もっとできることがあるのにそれをわざわざ諦めないといけないことは、地方に住む選択のネックである。住む分には都会の喧騒よりかは地方の閑静な環境のほうが良いと考える若者もいると思うが、なにせ選択肢がない。

H委員：若いときは、教養やスキルを磨きたいというチャレンジ精神があると思うが、それが叶う環境を市内で見つけにくいから市外で就職するのだと思う。甲賀市は、大手企業も多く入っているのでチャレンジや勉強できる環境はあると思うが、そのように感じられていないのが若者流出の大きな要因になっているのではないかな。

J委員：個人的にはとても好きなまちである。まだ市外に出ていくことを考える年齢でもないのに、みなさんの意見を聞いて気づかされることのほうが多かった。自身の大学であれば、枚方や高槻など京都以外の地域から通っている人も多くいるが、甲賀市と違うのは電車の本数。彼らが30～40分で行くことができる一方で、私は1時間半かかる。貴生川ですら、乗りたい電車を逃してしまったら、1時間待たないといけない。他の地域はもっと不便だと思う。

I委員：Uターンしたのは、親の影響が大きかった。仕方はないが、やはり不便を感じる。

J委員：普段は家と大学との行き来や大学で過ごす時間のほうが多く、このまちでの用事がない。遊ぶところもなく、友人を呼ぼうとも思わない。

H委員：そういった観点で言うと、東海道線沿いの地域には勝てない。草津線の複線化は進んでいるか。

J委員：1時間に1本になってから、1便当たりの乗降者数は定員に近づくようになったが、それでも人数が少ない印象がある。市民目線でも本数を増やしてほしいとはいえない。

H委員：現状、睡眠や食事など“生活”をするまちになっている。人が滞留する仕組みがあると、若者が

集まることのきっかけになるかもしれない。

J委員：選択肢があるということが、若者にとっては重要。

G委員：目の見えていたころは、ゴルフ場がたくさんあることは気に入っていた。いろんなコースがあるところも良い。ほかにもキャンプや溪流遊びも楽しめるので、都会から帰ってきて、自然を満喫するという余暇の過ごし方もあると思う。交通面においては、増便は難しくとも、待ち時間が減るということだけでも利用者満足度は大きく変わると思う。

K委員：やりやすく、効果があるのはデマンドバス。ただし、ある程度腹をくくって、思い切って着手しないといけない。試験運行の結果も1便当たり0.5人程度の乗車とのことであるが、スモールスタートや小規模試験運行は、待ち時間や利便性が著しく低くなるので、期待する成果は得られない。コンピュータでのシミュレーションでは、ある一定の本数以上から一気に乗降者数が増加する。自治体はどこかで思い切る必要がある。また、人手不足も深刻であり、もう10年経てば、お金をかけても雇用できる人がいないという状況になると思う。

K委員：新たに人を雇用するのも限界があるので、打開策としては、仕組み改善による効率化か自動運転の導入しかないと思う。

H委員：デマンドの利用者層はどのような方々か。

K委員：詳しくはデータを把握していないが、便利だとだれでも使うようになる。ある程度の規模で回すことに尽きる。

J委員：永源寺では、自動運転での試験運行をしている。甲賀市でもできないか。

K委員：自動運転にすれば、人手不足も解消できるうえ、すべての車を自動運転にすれば、交通事故もなくなる。本数も多くあると、行きたいところにも行けるし、経済活動も活性化される。

H委員：自動車免許返納にもつながり、自動車メンテナンスにかかるコストも浮くので、市民の経済事情も良くなると思う。ただ、自動車産業における利権もあるので、進めるのは難しいと思う。

K委員：自動運転が普及しても、車が便利であるということに変わりないので、車が一扫されるというわけではない。

H委員：待ち時間を短縮することも重要であるが、待ち時間が無駄にならないようなまちづくりも重要であると思う。特に、貴生川駅周辺は寄れるところがなさすぎる。ちょっと遊べる、ちょっと寄れる場所は大切。

G委員：高齢者にとっては、バスは医療と買い物に出向くための重要な足。バスのルート設定は重要であると思う。例えば、病院→銀行→市役所→スーパーのようなルートがあると、便数は増えなくとも利便性は向上すると思う。

I委員：75歳未満の方からは250円の運賃がかかるとのことであるが、例えば、企業に協賛していただき、運賃は1000円に設定するが、1000円分の商品券をプレゼントするなどすれば、市民、企業、市民、三者ともに得する仕組みが構築できるのではないかと。

グループ討議おわり

Cグループ

- L委員：市内で訪問看護ステーションの経営をしており、貴生川在住であるが、貴生川について傍観者になってしまっていた反省がある。
- M委員：貴生川駅のプロジェクトにかかわっている。甲賀市全体にお金が回る、働くだけでなく生活のためにどういうプロジェクトにするか考えなくてはならない。実証実験なので、イベントをずっとすることが目的ではない。実証実験への参画はすべて市内事業者で実施したいが、なかなか集まらない実態もある。大手ゼネコンにまかせてしまうと、お金が地域外へ流出してしまう。そのために、内生化することを考えている。
- N委員：毎日お惣菜を売っていると地域の困りごとの実態が見える。地域が回る仕組みということがよく出てくるが、地域にこだわって働き住んでいる人と学生と共に考えていかななくてはならないと感じるが、地域の方の参加があまりない現状がある。地域がしっかり考えていかないといけないと感じている。1日100人のお客さんに継続的に維持することは難しいという実感がある。なぜ甲賀市で甲賀市の食べ物を買わないといけないのかを理解しなくてはならないと感じる。外国籍の方に味付けをあわせるのは難しいと感じる。
- O委員：多文化共生の計画に関わっており、外国人さんの受付の現状についてヒアリングに回っている。外国籍の住民さんと話していると、甲賀市はサポートが充実していると感じておられる。市役所の対応も丁寧でいいと聞いている。外国籍の方のコミュニティの口コミで甲賀市は、甲賀市は良いという話が出ている。
- M委員：強みの施策は充実しなくてはならないと感じている。市外で甲賀市のものを売るのもいいと思う。
- N委員：甲賀市は外の人には評価されるが、地域内の方の評価が低いように感じる。甲賀市内の方が甲賀市の良さを理解していないように感じる。
- O委員：伊賀市の議員さんと意見交換したことがあるが、甲賀市を評価してもらっていた。
- P委員：土山在住で、道の駅に興味を持っている。普段は家にいることが多いが、協力できことがあれば協力したい。甲賀市内の人が甲賀市の良さをわかってくれることが大事。
- N委員：給食についての取組が素晴らしいと感じている。子供の、自分の育ったときの思い出として給食は大切だと感じる。甲賀市の給食はコメも良いものを使っているし、子供たちのために地元産の野菜など良い材料を選んでくれている。子供たちのために頑張っていることをもっとアピールしてはどうか。定住促進や道の駅の整備にお金を使うべきなのかどうかと感じる。遊びやイベントではなく、生活・食べ物・空気・人の温かさについての施策ができれば最高

だと考える。

M委員：貴生川がイベントだけやっているように感じられているように思うのをなんとかしたいと思っている。観光も良いが、定住のための機能を作りたい。子育てをしやすい場所、公共交通機関である電車を守ることを考えたい。

N委員：子育て応援の施策を頑張りたいなら、チラシをもっと早くに配るべきだと感じる。学校等にチラシを早めに配るべきではないか。起業のチラシも多すぎると感じる。貴生川のイベントに関しては、子供と一緒に参加したが、カヌー体験が楽しかったらしく、今年も楽しみにしている。子供がお金を落とすわけではないが、集まるようにチラシなどの広報・周知に努力すべきではないか。デジタルは、子供とお年寄りには厳しいと感じる。

P委員：デジタルばかりに頼ると頭の活性化によくないように思う。対象者に向けたチラシや周知を考えることが大事なのではないか。

N委員：情報は仕入れようと思えば仕入れられる。チラシの構成なども勉強しなくてはならないと感じる。

O委員：既存の団体に発信を頼むなどはどうか。昨年保育園の入園申請がデジタル化したが、外国籍の方にはハードルが高かったと感じる。甲賀市にはファミリーサポート制度もあって良い取組だと感じるが、その事業の情報へのアクセスが問題であると感じる。

M委員：外国籍住民さん向けの受付担当はいるのか。

O委員：なんでもかんでも相談に来られるので、相談件数が増えることだけがいいわけではないと感じている。

M委員：雇用している企業側が外国籍の方の支援にかかる費用を負担するような仕組みはできないだろうか。企業側との連携を強化していけば、企業誘致にも企業の人材確保にも有効ではないか。

O委員：商工労政課、市民活動推進課、国際交流協会がタッグを組んで外国人支援をしようとしている。

M委員：貴生川駅のプロジェクトにも外国籍の方目線の話盛り込めないか。

N委員：人口減少を止めるための施策は、子供関連と健康関連だけではないかと感じる。

L委員：人間の欲求を満たすという観点が重要だと感じる。退屈したくない、お金がほしい、おいしいもの食べたい、など。視点を少し上げて俯瞰で見る必要があるのではないか。

N委員：お惣菜を売っているときに「体に良い」、「素材が良い」ということだけではなく、「美味しい」でないと売れない、という話をしている。買ってもらうには買ってくれる人が喜んで、幸せを感じなければならぬと感じる。

L委員：欲望レベルの欲求を考えることが必要である。欲望を叶えられるまちにすることが大事。欲望を欲求レベルに落とし込まなくてはならないのではないか。

N委員：幸せを感じるまちにしたいなら、幸せに生活しなくてはならない。

L委員：お茶と美、フィットネスをからめるなどはどうか。一番良いのは、民間事業者が、自走して

成り立つ経営ができることだと考える。ビジネスマッチングが大切ではないか。

M委員：仮に甲賀市から出て行ってしまっても、戻ってきてもらえれば良いのではないか。

L委員：子供の欲求は、楽しいことをしたいということであると考え。

M委員：甲賀市の職員と関わっていると、ローカルの情報を良く知っていると感じる。その繋がりやマッチング力は素晴らしいと感じている。執務室にいても情報は入ってこないの、執務時間中にでも市の職員がまちに出られるようにしていけばどうか。

P委員：甲賀市の職員さんとまちづくり協議会の関連で情報交換できるが、協議会に入っているメンバーが楽しく感じないといけなく感じる。甲賀市全体の良さを市民が知っているという状態を目指したい。そういう状態になれば、口コミで市外の方にもアピールできるのではないかと。

O委員：行政頼りだけでも良くないと感じる。

O委員：災害対策はどのようになっているか。能登地震のようなことが起きればどうなるのだろうか。

M委員：仙川の氾濫想定は貴生川の検討材料に入っている。

L委員：福祉避難所には懸念があると感じている。

M委員：地域と関わっていると、自治振興会などで顔の見える関係を維持することは防災面でも非常に重要であると感じる。

O委員：民生委員さんも顔の見える関係を大切にしてくださっている。

M委員：顔が見える関係の構築ができていのかどうかで災害後の復興も全然違うように感じる。お祭りも経費カットされがちだが、顔が見える関係の構築には有用であるし大切だと考えている。災害対策に関しては、最悪の想定をしておく必要がある。

L委員：企業が何を悩んでいるかという10年後に従業員のほとんどが高齢者になることである。仕事をしている高齢者は元気だが、甲賀市に住めば元気に働けるといった視点も大事だと感じる。

M委員：公共交通の話も非常に大切だと感じている。子供、高齢者の移動の自由の確保は大切である。

グループ討議おわり

(3) スケジュール説明 (予定)

事務局：【次第】に基づき、今後のスケジュールを説明。

4. 閉会